

〈紹介〉

二松學舎大学文学部国文学科編

『二松學舎大学が案内する』

『東京都文学散歩』

吉崎 一衛

文学の楽しみかたにも流行がある。十年ほど前には声に出して読むことが、その後、鉛筆や筆で書くことが、というように「口」から「手」へと移ってきた。昨今は、さらにその文学作品の舞台や背景、作者ゆかりの地を歩くというように「足」に移っている。つまり、文学散歩である。書店には、この種の本が平積みになされて並んでいる。まさにタイムリーな企画である。

さて、このように氾濫する文学散歩の書物の中で、はたして目新しいものがあるのだろうか、といささか心配をしながらページをめくる。目次を見ると、文学・文化が幅広く取りあげられ、いやが上にも期待感をいだかせる。東京という都市空間を舞台に繰り広げられている有名な文学作品や興味をそえられる文化、日頃見過ごしてきた地名などがピックアップされている。

内容は「あとがき」にあるように「文学踏査という学びの伝統が長く国文学科にあった」こと、また、「他では類をみない学びの構成」をになう「国文学科全専任教員スタッフが執筆した」のであるから、充実していることはいまでもないことである。

これをあえて紹介すれば、まずは各執筆者の多彩な専門性や趣味が十分にいかされていることである。東京にまつわる文学・文化を、古くは万葉時代から現代の横溝正史まで、さらにはゴジラやアキバ文化までも取りあげ、これらを難しくなりすぎない文体で紹介している。そうとはいえ、類書との違いは当然のことながら専門的な視点から解説がなされていることである。

次に様々な時代やジャンルが取り上げながらも場所が交錯していることである。例えば銀座や浅草、本学周辺、江戸城といった場所が、異なるテーマの中でも紹介されている。このような構成は、ややもすると煩雑さのみを与えがちであるが、そこは執筆者の強い個性の照射によって、かえって読者に心地よい緊張感と楽しさを与えている。また、重複させることによって、電車の乗換駅のように途中で他のテーマへ移ることを可能にしている。これは読者本位の散歩をも期待してのものであろう。

さて、最後はやはり文学散歩の書物としての体裁である。各章ごとに、地図と文章がそのまま案内をしてくれる巧さ。そして、ほどよい頃には、有名な和菓子や十割そばなどの店までもを紹介する親切さ。そして何よりも持ち歩けるサイズと軽さが嬉しい。現在のトレンド「足」を踏まえた文学散歩の本として、書齋ではなく鞆に忍ばせておきたい好著である。